日中多義動詞「上がる」「上（shàng）」の イメージスキーマ・ネットワークの比較

Comparing Image Schema Networks of Polysemous Japanese and Chinese Verbs 'Agaru' and 'Shàng '

黄 文蓮†，橋本 敬‡
Wenlian Huang†， Takashi Hashimoto‡
†‡北陸先端科学技術大学院大学
Japan Advanced Institute of Science and Technology
†s2110074@jaist.ac.jp， ‡hash@jaist.ac.jp

概要

本研究は人間の身体的な体験が言語表現に反映されるという認知言語学の考え方を基盤として，日中多義語「上がる」「上（shàng）」について，イメージスキーマ・ネットワークの類似点・相違点を明らかにし，その比較から日中言語話者の認知の違いを探求することを試みる．本稿ではそれぞれの意味カテゴリを分析し，「上がる」は 9 種類，「上（shàng）」は 8 種類に分類した．そして，その分析を元にイメージスキーマ・ネットワークの一部を描いた．

キーワード : 認知言語学，多義語，概念メタファー，イメージスキーマ

1. はじめに

認知言語学では，言語使用者が身体的経験を通じて世界をどのように見ているのかを重視し，その見方が言語表現に表れると考える．そして，上下のような空間的な体験は世界の認識とメタファーを含む言語表現に重要な役割を果たすとされる[1，p20]．イメージ･スキーマはメタファーの経験的基盤となりうる[2，p79]．人間は上下のような空間的な身体経験があって，上下のようなイメージスキーマが生まれる．Johnson によるとイメージスキーマとは「日常的，具体的な経験のなかで繰り返し現れる（比較的単純な）パタン，形，規則性」である[3，p29]．例えば，「中に」と「外に」という概念は，容器のスキーマに基づいて理解される．心の中に考えを持つ，部屋の中に人がいるなどが容器のスキーマに該当する．つまり，イメージスキーマは単純的・抽象度が高いものである．

実際の言語使用では，単語は辞書に書かれた基本義だけではなく拡張義でもよく使われる．例えば，日本語の「ヤバイ」という言葉は現代の日本社会において基本義以外の拡張義がよく使用されている．本研究の研究対象は日本語の自動詞「上がる」や中国語の自動詞を表す「上（shàng）」を対象にする．「上がる」「上（shàng）」については，日本語と中国語で同じ漢字が用いられていても，拡張義の意味が違う場合がある．例えば，日本語の「上がる」は状態の終了（止む）（例えば「雨が上がる」）を表せるが，そのような用法は中国語にはない．一方で，中国語の「上（shàng）」は「記事やリストに載る」（例えば「上报纸 shàng bàozhǐ 新聞に載せる」），「規定の時間に経常的な活動をする」（例えば「上班 shàng bān) 仕事に行く」）という意味を表せる．

意味の拡張は比喩（メタファー，メトニミー）とイメージスキーマの変換によって生じる．類似性や随伴性を認識する人間の基本的な認知能力は，それぞれメタファーとメトニミーを通して語義の意味拡張を動機づける要因と考えられる[4]．イメージスキーマはわれわれの知覚に構造を与え，その構造は推論を行う際に利用され，イメージスキーマの変換は意味拡張の仕組みを説明する際に重要である[5，p440]．Langacker はイメージスキーマのネットワークモデルを提唱し，多義語の意味カテゴリの構築がプロトタイプとスキーマの両方によるとした[6，p140]．よって，人間の根本的な認知メカニズムの側面を探究したいならば，比喩及びイメージスキーマの両方の考察が必要だろう．

しかし，「上」に関する認知言語学的な日中対照研究は概念メタファー理論で意味カテゴリとその拡張を説明するに留まる[7]．イメージスキーマのレベルでの研究[8，9，10]は網羅的にイメージスキーマ・ネットワークの分析をしていない．イメージスキーマ・ネットワークは意味カテゴリから反映した個々なイメージスキーマの関係性のネットワークのような図を指す．つまり，意味拡張の裏にある認知を統合的に検討するには，イメージスキーマとそのネットワークの違いまで，検討すべきである．

そこで本研究は，Lakoff & Johnson の概念メタファー理論と Langacker のイメージスキーマ理論を同時に取り上げ，日中多義動詞「上がる」「上（shàng）」という事例に対する意味カテゴリ，イメージスキーマ，それらの拡張関係を網羅的に検討し，イメージスキーマ・ネットワークの比較を試みる．イメージスキーマ・ネットワ

ークの系統的な差が見いだせると，その差を説明できる日中言語話者の認知・視点の探求に繋がり得るだろう．

本研究リサーチ・クエスチョンを以下に示す．

1. 「上がる」「上（shàng）」の意味カテゴリはどのように分類されるか．
2. 「上がる」「上（shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの相違点は何か．

2-1 「上がる」「上（shàng）」の各意味カテゴリの意味拡張プロセス（メタファー，メトニミー）はどのようなものか．

2-2 「上がる」「上（shàng）」の各意味カテゴリのイメージスキーマはどのようなものか．

2-3 「上がる」「上（shàng）」の各イメージスキーマの変換によるイメージスキーマ・ネットワークの相違点は何か．

2. 方法

まずは「上がる」「上（shàng）」の意味カテゴリ分類した．分類基準は『日本語多義語学習辞典（動詞編）』[11]，「上（shàng）」は『現代漢語八百詞（第5巻）』[12]に参照した．次に，意味構造の分析は国広[13]が提唱した現象素を用いた．現象素とは，外界の物，動き，属性などを認知したものである．最後は，各意味カテゴリのイメージスキーマを作成する．イメージスキーマの作成には，トラジェクター（TR，移動体/注目される部分），ランドマーク（LM，基準点/参照点），TR の運動の軌跡という要素間の関係は Langacker の基準[14，p70]を用いる．各イメージスキーマの変換関係を含めてイメージスキーマ・ネットワークを作成し，「上がる」「上（shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの相違点を示す．

3. 結果・考察

結果1，「上がる」は「上に移動する」「水の中から陸に移動する」「家・部屋などに入る」「続いていた状態が終わる」「目上の人の所に行く」「価値が高い状態になる」「数値が大きくなる」「緊張する」「出現する」という9種類のカテゴリを分類した．「上（shàng）」は「上に移動する」「特定な用途がある場所に行く」「交通機関に乗る」「記事やリストに載る」「規定の時間に経常的な活動をする」「ある数量，程度に達する」「困難に対処する」「パフォームする場に出る」という8種類のカテゴリを分類した．その結果は表１・2が示したように，「上がる」の「上に移動する」というカテゴリの現象素は＜物体が物理空間を移動する＞＜移動の終点は相対的に物理空間中の上＞＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞と考えられる．具体的な例文を挙げると，「屋上へ上がる」「空に花火が上がる」「階段を上がる」の例文の中で，屋上・花火・階段という物体は物理空間を移動して，移動の起点は比較的に下であること，移動の終点は比較的に上であることが分かる．「上がる」「上（shàng）」の他の意味カテゴリも基本義「上に移動する」を基準にして現象素を分析した．具体的な分析の結果は表１・2が示したものである．

表１「上がる」の各意味カテゴリの現象素

意味項目（上がる）	現象素
上に移動する	＜物体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は相対的に物理空間中の上＞ ＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞
水の中から陸に移動する	＜主体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は陸＞ ＜移動の始点は水の中＞
家・部屋などに入る	＜主体が物理空間を移動する＞ ＜移動の始点は家・部屋の外＞ ＜移動の終点は家・部屋の中＞
続いていた状態が終わる	＜ある状態が変化する＞ ＜変化の前にはある状態が続いていた＞ ＜変化の後にはある状態が終わった＞
目上の人の所に行く	＜主体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は相対的に高い地位の人の所＞
価値が高い状態になる	＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞ ＜移動の終点は始点に比べて相対的に価値が高い＞
数値が大きくなる	＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞ ＜移動の終点は相対的に数値が大きい＞
緊張する	＜心身の状態が抽象空間を移動（変化）する＞ ＜移動の終点は始点に比べて相対的に緊張した状態＞
出現する	＜隠れた状態が物理空間を移動する＞

	＜移動の終点は始点に比べて相対的に物理空間中の上＞

表 2「上（shàng）」の各意味カテゴリの現象素

意味項目（shàng）	現象素
上に移動する	＜物体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は相対的に物理空間中の上＞ ＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞
特定な用途がある場所に行く	＜主体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は特定な用途がある場所＞ ＜特定な用途がある場所は始点に比べて相対的に物理空間中の上＞
交通機関に乗る	＜主体が物理空間を移動する＞ ＜移動の終点は交通機関＞ ＜移動の始点は交通機関の外＞
記事やリストに載る	＜ものが物理空間を移動する＞ ＜ものがほかの媒体の表面につく＞
規定の時間に経常的な活動をする	＜主体が公的な活動をする＞
ある数量，程度に達する	＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞ ＜移動の終点は相対的に数値が大きい＞
困難に対処する	＜主体がある状態空間を移動する＞ ＜移動の始点はある行為をしていない状態＞ ＜移動の終点はある行為をした状態＞ ＜行為は緊急事態・困難に伴う＞
パフォームする場に出る	＜主体がある状態空間を移動する＞ ＜移動の始点はパフォームをしていない状態＞ ＜移動の終点はパフォームをする状態＞ ＜聴衆や観客がいる＞

結果 2,「上がる」「上（shàng）」の意味拡張ネットワーク（図 2・3）を作成した．図 2・3 のように，赤い点線はメトニミー拡張を指す．黒い線はメタファー拡張を指す．図 2・3 の「上に移動する」というカテゴリはプロトタイプ意味（基本義），他のカテゴリは拡張義である．「水の中から陸に移動する」というカテゴリの例文は「プールから上がる」「風呂から上がる」「温泉から上がる」がある．これらの例文を表 1 の現象素に基づいて分析してみると，プール，風呂，温泉のような水が溜まる場所は比較的に下であることが分かる．移動の終点（陸）は比較的に上である．＜陸=上＞＜水が溜まる場所のところ=下＞は基本義の現象素に当てはまて，いわゆる類似性が生じるため，メタファー的拡張をしたことが考えられる．他の意味カテゴリも分析した現象素の結果に基づいて検討した．具体的な拡張関係は図 2・3 が示したものである．

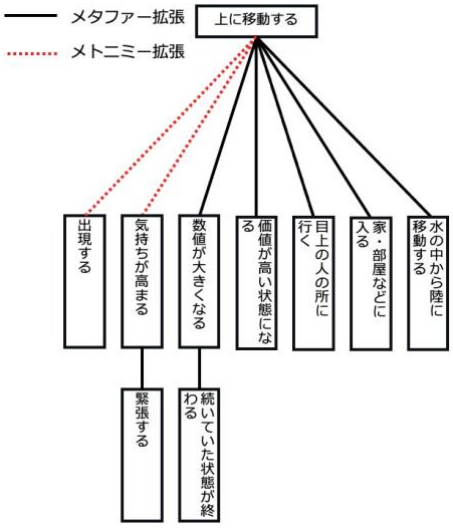

図 2「上がる」の意味拡張ネットワーク

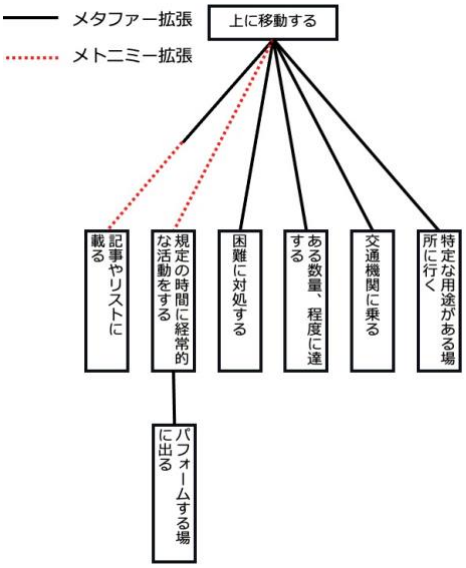

図 3「上（shàng）」の意味拡張ネットワーク

結果 3,「上がる」とと「上（shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの一部をそれぞれ図 4 と図 5 に描いた．丸は TR，長方形は LM，矢印は移動の方向を表す．図 4 と図 5 の TR はともに＜物体（物体 ＝ 主体（生物）＋ もの（非生物））＞であり，また，各イメージスキーマを囲む四角は移動の空間でここでは物理空間を表す．図 4 の上，左下，右上の LM はそれぞれ＜下方にある移動の起点＞，＜水の中＞，＜家・

部屋＞である．図 5 の，LM はそれぞれ＜下方にある移動の起点＞，＜特定な用途がある場所＞，＜交通機関の中＞である．図 4・5 の基本義と拡張義のイメージスキーマの変換関係はメタファーの拡張関係と考えられる．

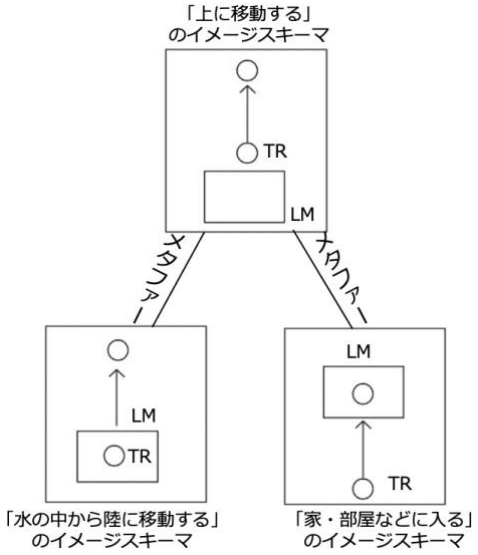

図 4「上がる」の一部の
イメージスキーマ・ネットワーク

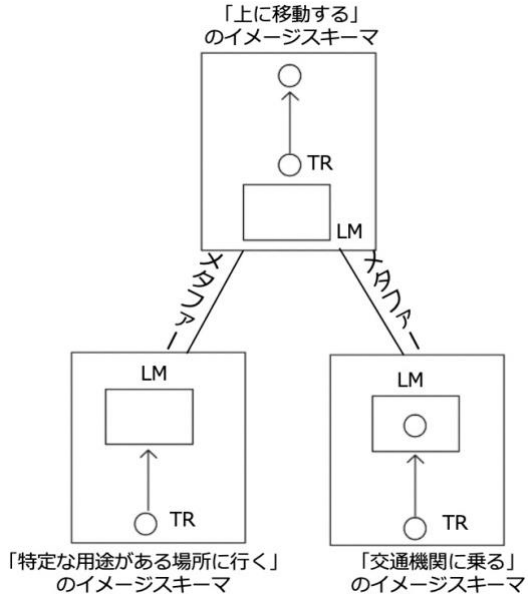

図 5「上（shàng)」の一部の
イメージスキーマ・ネットワーク

図 4・5 を比較してみると，日中の拡張義の「家・部屋などに入る」「交通機関に乗る」のイメージスキーマは同じであることが分かった．日本語の「上がる」の「水の中から陸に移動する」と中国語の「上（shàng)」の「特定な用途がある場所に行く」では，それぞれ，TR＜主体＞は LM＜特定な用途がある場所＞に向かって移動, TR＜主体＞は LM＜水の中＞から出る. つまり，日中の「上がる」「上（shàng)」のイメージスキーマは相違点があることが分かった.

文献

[1] Lakoff, G. & Johnson, M. , (1980) “Metaphors We Live By” , The University of Chicago Press.
[2] 鍋島弘治朗,（2002）“メタファーと意味の構造性 : プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から”,『認知言語学論考』Vol. 2.
[3] Johnson, M. , (1987) “The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination,and Reason” , The University of Chicago Press.
[4] 籾山洋介,深田智,（2003）“意味の拡張 松本曜（編） 認知意味論 （シリーズ認知言語学入門〈第 3 巻〉）”, 大修館書店, pp. 73-134.
[5] Lakoff, G. , (1987) “Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind” , The University of Chicago Press.
[6] Langacker, R. W. , (1988) “Foundations of Coginitive Grammar” ,Vol. 1,Stanford University Press.
[7] 左咏梅,（2007）“「上」と「下」のメタファーについて–日中対照研究” ,杏林大学大学院国際協力研究科大学院論文集, Vol. 4, pp. 47-63.
[8] 呂春燕,（2009）“中日移動動詞に関する認知意味論的対照研究日本語のアガル・サガルと中国語の「上・下」を中心に”, 広東外国語対外貿易大学東洋言語文化学院博士論文.
[9] 嚴馥,（2020）“中国語の“上（SHANG）”の複合的語彙ネットワーク”, 慶應義塾外国語教育研究センターJournal of Foreign Language Education, Vol. 17, pp. 77-100.
[10] 王璐菲,（2022）“V 上（SHANG）の語義およびイメージ・スキーマ” , Journal of Suihua University, Vol. 42, No. 8, pp. 64-67.
[11] 森山新,（2012）『日本語多義語学習辞典（動詞編）』, アルク出版社), pp. 17-23.
[12] 呂叔湘,（2002）『現代漢語八百詞（第 5 巻）』 遼寧教育出版社 356-358)
[13] 国広哲弥,（1994）“認知多義論―現象素の提唱―”,『言語研究』106, pp.22-44.
[14] Langacker, Ronald W. , (2008) “ Cognitive Grammar: A Basic Introduction” , Oxford University Press.